第3回コロナ禍災害支援会議　広島豪雨災害に学ぶ

今回の重要なキーワード「連携・協定」

西村仁志(にしむらひとし)さん　広島修道大学人間環境学部教授
2014年・2018年に豪雨被災

災害支援は

1995 阪神淡路大震災で初めて災害ボランティアを経験
2011 東日本大震災支援(RQ市民災害救援センター)
2014 広島豪雨・土砂災害支援(RQ広島・安佐北区災害VC)
2016 熊本地震災害支援(RQ九州)
2018 西日本豪雨災害支援(広島市安芸区VC・RQ広島)

【2014年豪雨災害について】
・8/19 夜に大雨・洪水警報　20 未明に土砂災害警戒
・死者75名　負傷者44名

=特徴=
ピンポイントな災害だった
広島市の都市機能には影響なし

西村さんの関わり方
・広島市・社協・赤十字・NPOセンター共同でボラ活動を支援
（大きく分けて4つのくくり）

ボラ活動の内容（VC）
・土砂出し
・家具移動など
・引っ越し手伝い

◯ボラの人と被災者のマッチング◯
　それに付随するあれこれ(物品の用意・支援物資の仕分けなど)→ボランティアのためのボランティア

・今回の場合、地域の人がボランティアのメインだった(ピンポイント被災だったため)
→地域どうしの助け合いの構図が見えてきた

・日毎に終了ミーティングを実施
→ニーズ確認等 手薄な部分にならないように

◯ボランティアは県内のみだった（ニーズに対して県内の人で十分だった）
RQ現場拠点を開けるか模索
・経験ある人を集めた
・共同生活をし、情報共有
・VCは基本日帰りボランティア
◯県内団体の県外ボランティア◯
→県内団体だが、実働部隊は経験のある県外者

広島修道大学 西村ゼミとして
・被災地域の子どもたちのケア
・ほうかご教室のボランティア(シフトを組んで大学生を派遣)

VC運営の秘訣
・地域の力
→地元のちから
・学部経験者のちから(RQ)
・学生の力

【2018年 豪雨災害について】
・7/6夜
・2014年と違い広範囲(岡山も)
・新幹線以外　電車・道路やられた

動き方がわかったので、災害本部の立ち上げに協力

安芸区(VC)
RQも始動7/17
大学7/21からボランティア派遣

西村の関連リンク
広島修道大と日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）と協力協定を締結していた。支援を得てボランティアバスを運行（坂町、安佐北区白木地区）
「学ボ新聞」
https://gakuvo.jp/gakuvo-shimbun2018/unv03/

広島市災害ボランティア活動連絡調整会議
https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/hukkoushien/11557.html

災害ボランティアハンドブック
https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/hukkoushien/11686.html

林美由貴(はやしみゆき/おりん)さん
自然環境企画「南風舎」・和歌山大学　災害化学・レジリエンス共創センター

阪神淡路大震災経験
岩手宮城内陸地震
東日本大地震(ボラ)
紀伊半島大水害(和歌山)
RQの活動に参加(広島・九州)

経験として、1つとして同じ災害はなかった！

なぜボランティアをするのか？？
→人よりいい思いをするのが違和感だから
→高尚な奉仕の精神はない
→経験として

【南海トラフ地震と和歌山県】
和歌山県は災害が多かった

南海トラフ地震がきたら、津波が一番早くくる（2分で来ると考えられているところも）
南部と北部で到達時間に大きな差があると予想
死者予想も2位

◯課題◯
被害差が大きいので危機意識に差がある
しかし、大と小でマッチングできる

「和歌山のいいところ」
=ボランティアセンター常設=
登録団体３９団体
個人649人
20箇所以上のストックヤード

なぜ常設？？
→希望に即座にこたえるために、広域的視点での支援体制が必要
→日常的な連携ができるように

・中核スタッフの養成研修
・災害対応訓練
キーパーソン：南出考さん

【和歌山大学生がどう動いたのか？】
・院生、学部生の動きから始まった
・他人ごとではないという思い

・4年間で5回ボランティアバスを運行
・のべ101名が参加
・学生団体もできた
・報告会という形で発信

2011.9.4 紀伊半島大水害発生
・学生団体が動いた、古民家を借り拠点に
・夏休みの間活動、秋も時間をつくり活動

水害の性質
・川幅が広い、水位が高い

9/6先遣隊が現場入りして支援開始（ニーズ調査などやった）

大学が日帰りのボランティアバスを運行

写真修復ボランティア
・地元の写真企業さんが協力

学生の熱に周りが動かされた

大学にボラインティアステーション常設＝通称むすぼら＝

理念
・自分ごとに
・現場で学ぶ・関わる
・ピンチに立ち上がる

・設立３ヶ月で65名登録
・学生のなりたい！やりたいを形に

【質疑】
Q.西村先生に質問：社協といかにうまくつながったのか？
A.もともとの知り合いではなかった・公式的な繋がりがはじまり
　2018年のときは2014年の繋がりがもととなった(顔合わせ・繋がり大切)

Q.林さんに質問：団体ごとの役割等まできまっているのか？

A.会議に出てこれるのは決まった1/3の団体・これからの課題である
　話しあう話はでてる

Q.宮崎では和歌山のような動きはあるのか？
A.社協などを含めた拠点的なものはあるが、他県に向けたもの～
　具体的な役割分担はまだで動きをしている最中

Q.大きな団体を作るときに、どういう声かけ・体制づくりをしたのか？
A.西村先生の場合、すでにあったが、分担としては市・NPOセンターが役割として決まっていたりする・それぞれができることを提供するイメージ
林さんの場合、できてしばらく経過しているが、、災害だけの団体がはいっている訳ではない。社協が直接アプローチしているパターンも多い
ニーズに応じて声かけをする
それぞれが得意なことをするイメージ

Q.信用のある特殊技能がある人が登録されている事例等はあるか？
A.長く支援に入ってくれる人は有償で支援していただいた事例もある

和歌山では水道工事等、他県からたすけてもらう協定がある災害協力協定
ただ、外部からきたら地元の会社に仕事を残すように言われた例がある。ただ、地元企業も被災しておりいつ動けるかわからない状況・住民が困ったいる状況があった

職を失い、すぐに復旧ができない人は行政が仕事として瓦礫撤去等をお願いしていた事例もある

Q.一番最初に動いた学生はいま？？
A.代表：中学校の先生(基本教育職)　副代表：自由人のため不明

Q.行政主導の本部との連携や仕事はいつはじまる？
A.西村先生：ほぼ同時に立ち上がる、その３、4日（準備期間）後から本格的にボランティア活動をする

佐々木さん：ボランティア側としては行政主導の情報はあまり入ってこない・意識しない

石田さん(プログラムOfficer)宮崎としての動きは？
本部とは直接話さないが、仲介してくれる人と話していた

ボランティアに行く時に現地に知り合いがいるかいないかで動きやすさにかなりの差がある

やはりコロナ対策は大変